光明

第拾卷第四號

圓融至德の嘉號は
惡を轉じ德を成ずる正智
難信金剛の信樂は
疑を除き證を得しむる眞理なり。

大眞日本宗 光明團本部發行

大正十四年七月一日（第三種郵便物認可）
昭和三年四月十五日發行（毎月一回十五日發行）

大正十四年七月一日（第三種郵便物認可）
昭和三年四月十五日發行（毎月一回十五日發行）

光明　第拾卷第四號　定價金拾錢

◆合掌宣言

第一、我は之れ久遠劫來の業苦に惱む。されど、傷き痛み惱める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。

第二、我はこれ曾無一善唯知作惡の凡夫。如來はこれ若不生者不取正覺の本願力に生き給ふみ親、罪惡如深重煩惱熾盛の我を其まゝ救ひ給ふ。

第三、惠まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する慘しき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の內に流れたまふ永遠の光明。聞せん哉。十方に響流したまふ招喚の勅命を。

第四、願くば自力小我の迷妄を破し、み光にはからはれて無我報謝の歡喜に生きん。

第五、「四海の信心の人は皆兄弟。」其處に共存の涙わく。共に和ぎ、尉藉し、皆動して、相愛に生きん哉。

◆本領

毀與褒貶に動ずるなかれ。逆境に失意する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一道に精進せよ。

救はれたる者は皆つて、全人類救濟のために、熱と血と涙とを以つて、念佛報謝宣傳のために、濁亂の社會に猛進せよ。

卷頭の叶び

人生の旅につかれた男がある
何を思ふや散る花の木影に？
何を考へるや響く夕の鐘の音に
何かしら心の扉の窓をたゝく。
孤獨！　哀愁！
その寂しい胸をどうしようとする。
左には酒と女とが待つ享樂の巷が
右には、悲觀　出家　自殺　人生逃避の暗黑の淵が
其中間にも道がある。極めて狹く見へる。
進め！　其中道を　苦をいだきしめて、
よし如何なる苦惱が横たはつてゐようと
足をかけたら今まで聞いたことのない聲が聞こゆる…南無阿彌陀佛…

地獄一定の上に

住岡狂風

前號では

前號では、無我の仰心と題してお話し致しました。誠に聖人の信仰は、死んで必ず極樂に參れるからといふやうな、餌を目あての景品ほしさの功利的信仰ではなかつた信の一念に如來のみ名によつて充されてゆく滿足でありました。たゞ念佛する。たゞ信ずる。其處には凡夫の一切のはからひがないのでありました。いかにして聖人はかゝる無我の仰心におはいりなさることが出來たか。それには多くの理由がありませうしかしこの御文を拜讀する時、私どもは二つの理由を發見することが出來ます。

師匠

その一つは前號にも一寸申しました如くに、よき人、即ち其師匠の上に眞の如來を拜み、眞に法然上人を信じきられたからであります。

『たとひ法然上人にすかされまいらせて念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。』

といふほどご師匠を信じきられたお方が外にあつたでせうか。聖道諸宗の人が無我を体驗しようとしつゝも、終に成功することが出來なかつたのは、釋尊をも應現の大善知識と見ず、單なるお手本として、其說かれた法を体得しようとして、釋尊を菩薩としてみたからではありますまいか。その態度の上に我があります。だから個人的には隨分道を得た方があつたとしても。長く一切衆生の救はれてゆく大道とならずに今日の如きものとなつたのであるまいか。

佛法僧の三寶、その三寶に絶對歸依する所に、眞の佛敎があります。法を求めて法を得なかつた聖人は、僧を得たのです。法然上人の上に聖人自身が救はれてゆく、佛

と法をみられたのです。すかされてもいゝとは、眞實一つを求めて走つた聖人のするどい眼にうつゝたたつた一人の師匠を絶對に信じられたお言葉です。聖人は、念佛に生きたまふ、法然上人の御本地が、阿彌陀如來であること……其阿彌陀如來の招喚のみ聲を、法然上人のみ口を通してきいたのです。師匠と我と一つ如來の本願の流れに見出すよろこび……如來それ自身にてましますお念佛がいつしか、わが身の上にも廻向されてある。極樂か、地獄か、それさえ問ふ必要がない。現前脚下に見出された救ひの船、あゝ念佛する時、久遠の業障を負ひつゝ、身ははや弘誓のみ船の船人でありました。其處に法然上人を發見し、釋尊を發見し、御同朋を發見せられ一切諸佛の讃歎を發見せられたのであります。探ねたものがこゝにあつたのです求めたお方がこゝに在しましだのです。實に遠き宿緣は聖人を善知識のもとに運びました。

更に我々は聖人のもつと內面的な世界を聞かねばなりませぬ。

いづれの行も及びがたき身

『そのゆへは、自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまふして、地獄におちてさふらはばこそ、すかされ奉りてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。』

この節を拜讀いたします時、そこに、きはどひお言葉を見出さねばなりません。

『……いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。』

それは實に聖人の哀心の聲であります。ごまかすことのできなかつた、僞善者になることの出來なかつた親鸞樣は、あまりにも眞實を求めることに忠實であつたのです

お歳九さいの時粟田口の青蓮院で御出家なされてから二十ケ年間聖人は決して單なる學問を求めなかつた。漠然たる佛敎を求めなかつた。聖人自身が心から滿足し、救

はれてゆく道を求めたのでありました。

自分を提げて……自分全体をなげだして……自分自身をいつはらずに……眞に自分の哀心の願を一致する道を求めてやまぬ若き哲人には、血のにじむやうな求道があつたのであります。

學べば深い哲學もわかります。天台宗の奥義も、大乘佛教の論理も知られます。しかし一度自分自身の内心の世界を省る時、五濁の世界に生れて、濁りはてた自分をどうすることも出來ませぬ。

『一切衆生悉く佛性あり』の一句位聞いて、要するに人間にも佛性あるのだ位でわかつたつもりでゐるほど聖人はお目出度い智者ではなかつたのです。

多くの山法師たちは、眞の求道を忘れてしまつて、所謂叡山の悪僧となつて、時の天子樣すらお困りになさるほど暴れます。僧とは名のみです。又學者たちは精に勉強して、僧位がのぼる位なことを專念心かける位が關の山であります。けれども聖人は地位や名利を得るために山に登つたのではありませぬ、單なる學問を得るために出家したのではありません。自分の救はれる道がほしかつたのです。

誠に自分を自分でゴマ化される人にどうして眞の救ひがわかりませうぞ。『定水をこらすといへども、識浪しきりにうごき、心月を觀ずといへども、妄雲なほおほふ。しかるに一息つかざれば千載ながくゆく。』死はせまります。一息つがなければと、無常を思ひ、どうすることもできない心の動きを見ては、『斷惑證理、愚鈍の身成じがたく、速成覺位、末代の機およびがたし。』とあらゆる聖道の自力の道にお暇しなければならなかつたのであります。『いづれの行もおよびがたき身なれば地獄は一定すみかぞかし。』何といふ悲しい、そして悲痛な自覺でありませう。

凡夫さながらに

さうした行結つた聖人は、御師匠法然上人の御化導によつて、地獄一定のまゝが救

はれてゆく、絶對他力のみ救ひにふれられたのでありました。

合掌念佛……　阿彌陀如來の大行はそのまゝ罪惡生死の凡夫さながらの上に廻向顯現されてあります。たのむ心も念ずる心もそれは如來の願心そのまゝの廻向でありました。

地獄一定を如來にまで高めるのではない。煩惱を斷滅するのでもない。地獄を淨土にかへるのではない。煩惱を消滅して清くなるのでもない。さとるのでもない。教化のままに淨土の聖關は開かれて、如來が煩惱のままを攝取して下さる。如來の願心は聖者の高き峯にあるのではなくて生死巖頭に動きたまひ、罪濁の生死海底に動いてあつたのでありました。

かうした信仰の眼が惠まれた時、千古の疑問は氷解せられて、聖人は大乘佛教の極致にでられたのでありました。身は生死海にゐつつも、淨土聖衆のかずであります。淨土は生死さながらの中から開けゆくのでありました。

一切群生海に

關東の同行に對する聖人の大膽なる告白、私は大膽なる告白と申します。包むのがかくすのが、人間の本性であります。一分でも賢く見られたい。善人だと見られたい特に關東からはるばる訪ねて來た隨喜者に對して、自分の素裸な相をなげ出して、

『いづれの行もおよびがたき身なれば地獄は一定すみかぞかし』とはあまりに大膽なる告白であります。行ひすまし大善知識になりすました態度は遂に見られませぬ。

如來を背におふて、法を說いて下さつた七高僧の方々、それは如來の久遠の願心を表明して下された尊い方々であります。それらの方は勿論尊いには尊いけれども、龍樹菩薩も天親菩薩もあまりにたかい哲學者であり、聖者であります。源信和尙の念佛生活も・法然上人の專修念佛の生活も尊い、しかしそこには在家の凡夫として人間の家庭生活の痛々しい体驗がない。唯聖人のみは一切群生の限りなき罪業を御自身の上

に見つめ、大地から生にぬいた久遠の凡夫として、それら七高僧にむかつて、教を受ける人であり、聞く人でありました。釋尊はじめ、七高僧の態度が如來の權化であるならば、親鸞聖人は、一切群生の代表である。一切衆生の罪濁のあらん限りを、一身の上に見つめ、一切群生の内的運命を一身に荷負しつゝ、如來に歸命した聖人こそは一文不知の我等の前に、眞の大道を開拓して下さつた先達でなくてはなりませぬ。堂々たる覺れる者としての態度は今の世にも、至る所に見られます。しかし『地獄は一定すみかぞかし』と、覺り得ざる者として、凡夫の本形をなげ出して、念佛一つに救はれてゆく大道を堂々示して行かれた聖人をなつかしまずにはゐられませぬ。惡を造りつゝ惡を作らない顔をする、僞を言ひつゝ僞を云はぬ顔をする、それが救はれぬ者の世界であります。念佛のうちにこのまゝの救ひを知らして貰ふ、それはあまりに平易すぎるかも知れぬ。あまりに簡單であるかも知れぬ。しかしそこには、自己自身の久遠の相がほり出されてあり、深刻に、人生そのものを知る智慧が輝いてゐる。

『淺きは深きなり。』「このまゝ救はれる」それは淺くとれば淺い、しかし、深くとれば、これほど深い世界がどこにあらふ。

自然

自然が美しいのは生きておるからである。技巧せられたものは如何に美しくても死んでおる人間の技巧は遂に道ばたの名もない小さい草花の一つにすら及ばない。

人間のあらゆる披巧が棄つた時、こはれた時、自然法爾の念佛が廻向顯現します。念佛が、正行であり、正業であるのは、それが人間の分別によつて裝はれ飾られたものでなくして、如來の本願の行だからであります。『他力とは本願力これなり。』本願の行そのものが念佛となつて。地獄一定のまゝの上に活きて下さる。それは自然であります。

罪濁のこの機を棄てゝ、光の世界に到達しようとする所に、聖道門があり、無限の

み光を背景にして深い業障にさめる所に淨土門の他力があります。

聖道門の行詰りが『いづれの行も及びがたき身』であり「地獄一定」でありました。然れば念佛に救はれた後にはこの悲しい機はなくなるか。決してなくならないのであります。いゝえ、どうかしてこの自分を解決づけて、淨土を生みだそうとした、我執がうちくだかれてみればあらゆる解決が絶望になります。一切の自力が無効になつてしまふて、如來の本願の行だけが生きてきます。

善導大師の『出離の縁あることなし。』とのお云葉は如來の大悲に攝取された我の相であります。凡夫は又しても〳〵安價なる往生を自分の上に肯定しやうします。そうして第一義的な問題をすぐほつてしまつて、何でもない道草に自分をいつはります如來を見失ふた時、衆生のすがたを見失ひます。如來と衆生とを見失ふた時、空漠な概念だけが殘り、高慢な頭だけがあります。

如來の本願は無限にこの我々のはからひを否定し、永遠に否定します。この如來の永遠の否定の前には、『出離の縁あることなし』であります。

聞いておぼへます。聞いてよろこびます。聞いて稱にますそうした一つのものがひらめくと、すぐにそれを執へて、往生を肯定します。この出來るときめることは疑心の一つのすがたでありますが、それをそうとは思ひませぬ。このうたがひが、『出來る』『出來ない』と二つのすがたをとります。出來るときめることが、うたがひの一のすがたであることは考へませぬ。この安價な自力疑心の往生の肯定の前にあらはれる淨土が方便化身土であります。『誓願不思議をうたがひて、名を稱する往生は、宮殿のうちに五百歳むなしくすぐとぞのべたまふ。』これは化土に往生する人のことであります。しかし誓願不思議をうたがふてゐると思ふて、うたがつてゐるならば、それに腰かけてはゐられませぬ。知らずしてうたがつてゐるのであります。み名をとなへることに力を入れたら、すぐ如來の誓願不思議のおはからひではなくて、自力のつまづきであります。稱名の行のない所にお救ひはありませぬ。しかし力をいれたらそ

れは人間のはからひであります。人間の自力の上に安價な往生を肯定して稱名をはむ所に、誓願不思議をうたがふて、み名を稱する往生があるのです。それは宮殿のうちに因はれて、佛を見ず、法を聞かず、僧を見ませぬ。如來の信樂は永遠に、そして限りなくこの自力の『出來る』ときめこむ心を否定します。出來るがなくなる時、『往生出來ない。』それもなくなります。この出來る出來ないの二つが棄つた所に、出離の緣あることなしといふ機の深信が生れます。この出離の緣あることなしと云ふ永遠の否定の上にのみ眞實の信樂があり如來の本願力のみが輝き眞、佛土が開顯されてきます。

聖人は一生涯、大地の聖者でありました。天上から降つた權化の人でなくて地から湧いた久遠の凡夫の自覺におたちになりました。『淨土眞宗に歸すれども眞寶の心はありがたし、虛假不實の我が身にて、淸淨の心もさらになし。』これは八十幾歲の老齡に達したまひし聖人の悲嘆述懷であります。不眞實を肯定せられたのではなくて、不眞實を悲嘆あそばされたのであります。若々しい聖人であります。しかしその上には、如來の眞實が光つてゐます。如來の前にはつきりと自分を見てゆかれたのであります。我等はともすれば、善人になりすまし、化城にふみまよふて、天晴れ大善知識になりすましたり、お同行になりきつて、眞實の導きを忘れ、招喚の聲を失ふて、高あがりをします。心につくる厚い殼を破られて鮮活な生々しい信の心に蘇らせて頂く時、どうして高慢な山の頂にゐられませうぞ。

いづれの行もおよびがたき身であるとの聖人のみ云葉にふれます時、合掌して念佛せづにはゐられませぬ。

惡業をなげすてゝ、光を仰いで單なる讃光によつて救ひを成就しようとするのは、功利的な世界にさまよふてゐる者の考へであります。しかし聖人は光によつて大地の上にうつる暗い影、そのかげの上におどる光を拜まれたのであります。地獄一定の上に廻向される念佛でありました。攝取不捨の光明によつて救はれてゆくのでありました

た。彼岸より生死現實の現前の脚下に貫く弘誓のみ救ひでないことにどうして眞實の救ひがありませう。善惡の機が如何なる相であらうとも、如來の本願は平等に攝取して下さるのでありました。地獄一定が地獄一定のまゝに、救はれてゆくのでありました。

自暴・自棄か

『たとひ法然上人にすかされまゐらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからずさうらふ。そのゆへは自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が念佛して地獄にもおちてさふらはゞこそすかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめいづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。』

とのお云葉を拜すると、或は聖人は、いづれおちるのだから、念佛でもせよ、助からなかつたとて、もと〳〵だ損はないといふような自暴的な心ではないかと、いふように思はれます。しかしそれは決してさうではないのであります。

よくこんなことを言つてゐる人があります。『いづれ釋尊とか、親鸞とかいふ方は俺たちよりもにらい人なのだ。だからすかされてもいいぢやないか。まあ念佛でもしよう。いづれわからんのだ。』しかしそれは決して信念でも信仰でもありませぬ。それは盲信であり、大切な問題を棄てたのです。

前にも申した如く、眞實をにらむことにおいて聖人ほど鋭い方はなかつた。いつはることのできぬ魂、いかなるものにも盲從したり、屈從したりするお方ではありません。だから自棄的になつて、なげられたり、いい加減に妥協しなさつたのではなくて眞の善知識に會はれ、如來に救はれたのであります。自餘の行が駄目であることを身に持つて体驗して、絶對他力の救濟に滿足されたのであります。それはやがて眼をそのつぎの節にうつせば自ら解決されてゆきます。（つゞく）

苦悶の教團

―時代の推移と三寶の權威續稿―

藤原三千丸

一

自ら覺り他を導き、その人格圓滿窮りなき釋尊は自ら好んで反對者と議論をしやうとはせられなかつた。その當時民間に行はれてゐた素樸な信仰に對しては誠に寛裕な態度を執りこれを廢棄し給ふことは絶ねてなく。唯因果を撥無し應報を否定する六師外通の徒に對しては心からの憐愍を以てその謬見を指摘せられた。されば初めて佛に歸依し來る者には必ず施論戒論生天の論を以てせられるのが常であつた。思ふにこれ等は宗教一般論であり無信仰なる者に對して先づ通俗の信仰を示して心の調熟を計られたものであらう。聽者若しこの論に共鳴し來るなれば漸々に四諦の理を說いて佛教の本義を示されたのである。この四諦の理をも釋尊は決して獨自の創見とはせられず諸佛の常法であると明言し給ふた。教法の絶對性と永久性とは此の點に示されて充分であると思ふ。

所謂四諦の理とは苦諦　集諦　滅諦　道諦の四である。苦諦とは現實界の諸相に諦かることであり、集諦とは現實界の背後に作用して現實を現實たらしめてゐるところの見ねざる力に諦かなることである。即ち苦集の二諦は無常の原理に通達することに外ならぬ。滅諦とは理想界たる涅槃の悟界であり、道諦とは理想界を理想界たらしむるところの力に諦かなることである。即ち滅道二諦は永劫の生命原理とも云ふことが出來るだらう。

現實界に於ける總ての事象は苦集二諦に總括せられ得る。この世にはこの無常原理から除外さるる何物もない。賤しきも尊きも。賢きも愚かなるも、有情非情悉く、時々刻々に生滅を重ね行きて暫しも止まらぬのである。

一切行無常
起者必有滅
無生即無死
此滅最爲樂

此偈は經典中屢々みらるる所の要句である。釋尊は或時この世の諸の力の中で如來の智力の最も大なることを屢々述べ來つた後に、この如來の智力よりも無常力は更に強力である。やがて我も亦無常力に支配されて滅度に到るべしと說き給ふた。

芳壽八十に滿ち給ふた釋尊は倶尸那羅城外の寂しい沙羅樹林に、迫り來る涅槃の時を待ちつつ數多の弟子にとり圍まれて靜かに說法を續けられたが、阿難に對して殘された情ある數語を最後に遂にこの世を立ち給ふたのであつた。

二

釋尊の入滅は、これを救主と仰いだ佛弟子達にとつて最も悲しい事實であつた。

『如來の滅度し給ふこと何ぞその駛き
世尊の滅度し給ふこと何ぞその疾き
大法の淪翳すること何ぞその速き
群生長く衰へ世間眼滅す

譬へば大樹の根拔かれて枝條摧析するが如し』

悲號慟哭の聲は天地に滿ちた。暗い憂愁の影は一時に世上を覆ふた。

釋尊といふ大人格によつて統一を得てゐた佛教々團が突如その大教主を失つたことは必ずやそこに大きな動搖を惹起したであらう。佛弟子達は如何にしてその動搖を切りぬけて行つたであらうか。私は本稿の最初に於て、次の聖語を掲示して置いた。

『汝等當に自ら熾燃たるに法に於て熾燃たれ、他に熾燃たることなかれ、當に自ら歸依するに法に於て歸依し他に歸依することなかれ。』

この聖語は大教主を失つた佛弟子達が奮起する原動力であつた。釋尊の肉体は滅ぶとも、その圓滿なる人格は遺された教法に織り込まれて永久に現實の苦海を照すであらふ。一時悲嘆に沈んだ聖弟子達は教法傳持といふ彼等の責務に目醒めた。

智慧第一と云はれた舍利弗と神通第一と云はれた目犍連とは釋尊教團の双璧であつたが夙に入滅して世になかつた。此處に聖弟子の衆望は大迦葉尊者に集り、彼は遺弟子五百人を指揮して遺法編纂の偉業にとりかかつたのである。左に暫く大迦葉尊者の傳記を述べやう。

三

大迦葉は偸羅厥叉國の富祐なる婆羅門の家に生れた。性來聰明にして智慧衆に優れ萬人から其の將來を囑目されてゐた。然しながら幼時から五欲を樂まず唯眞理をのみ求めて孜々としてゐることは家庭の繁榮を望む父母にとつては大きな惱みの種であつた。大迦葉が年十五に達した時、父母は彼を呼んで妻帶を勸めた。勿論迦葉がこれを受諾する筈はなかつた。再三再四辭退したが父母は尙も迫り來るので遂に彼は父母に對して難題を持ち出した。それは若し世にこの身体金色に輝く女性あらばその女性を迎へて我が妻となさうといふのであつた。

父母は世に金色の女ありとは思はなかつたけれども、息子の漸く受諾したその願を滿足させやうと、金色の女性を求めて諸國を探した。彼等は或る婆羅門の建言を入れて黃金の人像を作りこれを車に乘せて村から村へと曳き歩いた。村の娘達は爭ふて出で來りその金像を禮拜するのであつた。然るにその内に或る一人の女がその金像に向つて禮拜するや、不思議にもその顏面はキラ〳〵と金色に輝き來つたのである。その娘は直ちに大迦葉の家に連れ歸られた。よもや金色の女性のこの世に居る筈はないと思つてゐた大迦葉は驚いたけれども、約束であるから仕方なくその女性を入れて妻とした。然しながら大迦葉の禁欲は牢固として拔けなかつた。彼の新しき妻も亦彼を

理解した。外面上夫婦であるけれども彼等は同心の友として交はつたに過ぎなかつた彼等は決して床を共にして寢なかつた。父母は益々愁ひて遂に一策を案じ、或る夜迦葉夫婦の寢室の床を一脚にして置いた。然しながら迦葉夫婦は平然として一人が床にある時は一人が立つて靜かに室内を歩行しながら眞理の道を念じてゐたといふ。

斯くして遂に大迦葉は釋尊敎團に走せて出家修道したのである。彼は釋尊在世中屈指の弟子の一人であつたが、不幸にして釋尊入滅の時は釋尊を離れて遠く遊行中であつたので涅槃の夕には在席しなかつた。この事は彼の千載の遺憾であつたに相違ない然しながら今や敎法編纂といふ大偉業が彼に委托せられた。彼は喜んでこの事業にあたつたのである。

或る方

呉行の汽車が矢野を動きはじめた時です。

『おや住岡先生！　隨分御久う御座います。いい所であひました。』

といつて靜に私のまへに立つたのは、F氏でありました。この前見た時よりは、少し体がやせてゐるようであるが、肉つきのいい巨大な体を私の前に移されたのでありました。彼は眞宗の僧呂で本年二十七歳になつた青年であります。

私がこの前にあつたのは鞆の明圓寺での講習會の時であります。さうしてそれより前に、三原の森醫院で一度會ひました。今日で三回目であります。

Fさんは今別府の大佛山の布敎師なつてゐなさるさうで、大佛の寫眞を見せて下さつたり、あの世界一の**コンクリート**の大佛樣について丁寧と說明して下さつたのであります。私はそれを聞いておどろきました。高さが八十尺もあつたり、顏のはゞが十八尺八寸、親指のまはりさへ六尺四寸八分あるさうで、更に大佛の中は三階まであつて七間四面の本堂があつたり、樣々の佛像が安置してあつたり、六道などにかたどつ

た所があつたりすること等聞かして貰ひました。

Fさんは更に大佛山縁起錄を下さつたり、繪はがきやお菓子までくれました。

Fさんは京都を去つて別府の大佛山に來たことについて一通り語された。其中に汽車は呉につきました。

私はFさんに會ふて、誠に不思議な思ひが湧くのでありました。それは今日のFさんは前に見た時よりは全く別人のような氣がするのです。實をいふと前に會つた時のFさんは何だか、高あがりしたツケ〳〵した角が見にて、人を見下すような、そしてその話を聞いてゐても、どうもしつくりしない所がありました。

それだのに、今日のFさんはなつかしい態度です。裝つたのでもなく、飾つたのでもなくて、自然な謙虚さが見にます。へりくだつた無理のない應得といひ、話の心持といひ、ふんはりした柔いものが其上に輝いてゐるようであります。まるで別人のような氣がします。私はどうしたのであらふ。私がこの前に會つた時、私の心の高あがりのために、この方を今日のような心で見られなかつたのではあるまいかとさへ思ふたのであります。しかしどうしても別の人のようであります。

汽車から降りて街に出ましたが、船の時間がわからないので、驛の前の運送店で聞いてみました。運送店の方は電話をかけて問ひ合せて下さつた。時間があるので、一緒にそこの旅館でお晝食をとることにしました。

どうも不思議です。私どもは以前とちがつて全く一つになつて、共に語り、共に食ひました。

やがてこの不思議な謎のとける時がきました。それはこうであります。

Fさんが別府の東晧覺氏の佛教會館で講演してゐた時のことであつた。或日講演を聞きにこれた尼崎氏から一寸きてくれとの使がきたので、Fさんは尼崎さんの別莊に出かけた。尼崎氏は今の教界の名ある人たちはたれでも交つてゐられる在家の居士でありました。

Fさんは、尼崎さんの前には、全く權威がなくなつたのです。さうして打らくだかれたのであります。かうしてFさんの上に大きな轉機が與へられたのだそうであります。

私どもは、其場所をでない限り自分のゐる所を知りませぬ。

『私は今までは全くいけなかつたのです。わかつた氣でゐたことが全く間違ひであつたのです。尼崎さんは全く敬服に價する方です。私は尼崎さんの弟子になつてしまつたのです。それで以前のことを考へると實に相すまぬことです。各地を大分おことはり云つてまはりました。皆樣におわびしたい氣で一ぱいです。』

今まで自分の魂に聞かすことを忘れてしまつて、人に聞かす話をのみしてゐたことをくれ〳〵も悔いてゐられます。やがて時間が來たので出ました。電車の中でも、再會を約して別れました。

何かしら大きなものにうたれたやうな氣がしました。

花見

講演から歸ると暇が一日あつたので、妹が比治山の櫻を見につれてゆけとねだるので、夜八時頃一緒に出ました。御便殿入口に來て登りはじめるとあとから〳〵人の波がおしよせます。上る人と下る人とで道はふさがつて身動きも出來ませぬ。警官は口ぎたなく叱つても人の動きはなか〳〵とれませぬ。何といふ花見でせう。やつと大衆におされて御便殿前に來ますと、花は今が盛りです。花の下では酒のみたちの狂乱の樣子があさましく、しかもそれを立つてかきを造つて見てゐます。女が歌ひ狂つてゐます。男がけんを打つてゐます。喧嘩もあります。それを見物してゐます。何といふ花見でせう。人生といふものゝ相を見せつけられたやうな氣がします。私は昨日能美島の大原の八幡さんに登りました。櫻の花が、麓の家に咲きほこつてゐました。あの靜かな田舍、そこにこそ惠まれた平和な春があります。都會人の不幸を思ひます。

さとつたように云つた所で凡夫はやはり凡夫です。

温き心

石川啄木は、なつかしい詩人であります。彼は歌つてゐます。

『非凡なる人のごとくにふるまへる
後のさびしさは
何にかたぐへむ』

其凡夫が又しても非凡なる聖者の眞似をしたり、偉人を氣取つたり、さとつた風をします。さうしてほんとの自分がわかつた時には言ひようのない淋しさを感じます。聖者や偉人は決して、非凡なりとうぬぼれたのではなかつたのです。

『一粒の米の重さが　三千世界の重さにまさる』

それは世尊のみ敎であつた

その重さは合掌してのみ知られる重さであつた。

合掌

ものの眞のすがたは

ものゝ深い意味は
唯合掌した時だけわかる
私は批判するのだと云つて
他人を冷くさばいてゐる
冷たくさばく時　其度に
さばかれた人が傷ついてゆく
傷つけられた人から返つて來る
冷たい仕草を更にさばく
かうして人と私が遠ざかつてゆく
批判とさばきはちがふ
批判の背後にも溫い心が動くなら
其一句一句が自他共に救ふであらふ

批判を自分にむけないで
完全なものゝように高くとまつて
人をのみさばいてゆく
それが自分のすがたであつた
合掌した時、私のこの淺間しい相が見える
皆さんゆるして下さい
さうした氣持が、私の魂の底を涙ぐませる
私は今頃何年間にも受けたことのない溫い〳〵手紙を頂いた
讀んでゐる間に泣けた
合掌したい心になつた
ほめられてあるのに、私はつけあがる氣になれないで
私の樣々な欠點が見えて來た

私は不思議に思ふた
さうして私は、私の今迄の態度が
若い人たちにむけた忠告や教訓めいた態度が
みんな無駄になるわけがわかつた
叱られたり、教訓されたり
惡いところをいはれたばかりでは
人は決して惡い所に氣づきもしないし
よい傾向にもむいては來ない
百回叱つたよりも
一回の理解ある賞讃が
どれだけ人をいかすかも知れぬ
人には誰にでもいい所がある

合掌して見なければ
人のいい所にはちつとも眼がつかない
この眼は人の欠点ならすぐ目につくが
他人よのい所には眼がつかない
この耳は他人の悪いことをきくことにするどい
さうした私の病が合掌した時見にて來る

大自然

大自然の前に頭をたれてだまつて考へる
あまりに人間は騒々しい
人間のしてゐることが
どれだけ大自然の聖旨にかのうてゐるのか
聖なる殿堂に耳をよせて
じつと久遠のみ親の胸底から

流れ出るおぼしめしを
聞いて行つた聖者たちが
限りなくなつかしい
人間の問題の解決が
人間の手では出來ない
文化とは内なる世界が大自然に通じて
自然のすがたのまゝに生きる世界を創造することだ
深い哲學は騒々しい世界からは生れなかつた
大きな宗教は考へない人たちの間からは生れなかつた
沈默！
それはもつと雄辯な大自然の無聲の聲を聞くためである
一度無聲の聲が云葉にせられた時

人間はその云葉にしばられ
型をつくつてそれにはまらうとする
それはもう生活の墮落である
哲學するとは、つまり大自然へとかへりゆくことである
哲學するものにとつては
先きの哲人たちが殘してくれた文章や云葉は
我等にはなくてはならぬものである
人類に與へられた聖典は、大自然の奥祕の血であり生命である
我等は聖典を手に、大自然のみ聲に生きねばならぬ
念佛は聖人にとつては、そのまゝ、如來の招喚のみ聲であり
如來こゝにありとの宣言であつた

魂の響

大音樂家が樂器をひいてゐる時には、決して手がひいてゐるのではない
「神技」とか「神韻」とかいふ云葉がある
魂のひゞきである
魂のひゞきであるならば、力がある
人間が賢くなつて來て、老ひて來ると魂の世界から……技巧の世界に墮落する
どんなに美しうても魂のひゞきがなくなつたものには、ほんとの美も力もない
空虛などは、人間のつくつた裝ひの内面のことである
常にかたい殼をやぶつては、初々しい童魂に生きねばならぬ
合掌するといふも、大自然にきくといふも、それは、より新らしく現實から現實に
往生する若き魂のひゞきの世界にかへることなのだ
彼岸から限りなき慈愛なる招喚の聲を聞く

眞の生活には自覺がある。
自覺なくしても生存はできる。
しかし自覺なくしては絶對に生活はない。

自覺なきものは習慣にひきずられる。

他人の云葉や、他律的な命令にもみひきずられて、形から形の上を上すべりして、自分のほんとうの道を考へない。

何時も愚痴や不平に囚へられるか、安價な妥協に腰をおろして所謂『白紙の卷物』のまゝで五十年がおはつてしまふ。

何物を見ても、誰をみても、驚きの心を持たない。

自ら進んで道を求めようともせず、自分の現狀についてたいした惱みも持たない。

西洋の哲人は『人間は弱い葦だ。しかし考へる葦だ。』といつたけれど、深く考へてみることをしない。

人間を唯、やり手と、やり手でない人とに仕別して、所謂小才を使つてやり手にならふとするのが關の山である。

かうして老ひると、なまけること、金をためたいと思ふこと、それくらひが全部になる、これらは弱き善人で、目覺めざる大部分の人たちである。

更にすゝんで惰落すると、惡友に誘惑されたり、金持であることがたゝつたりして放蕩者になり、やがては、罪惡の淵にしづみはて、世間に害毒を流す。

法律のつなはたりをやつて、良民の膏血をしぼり、不正の金をあつめて、浮薄なる榮華に世間をけがし、時に代議士等になりすましては、一國の政治を私利のために利用し、國家の前途に拭ふことのできぬ、禍害を流す。

時に、賢者　善人を迫害し、攻擊して、私利のために恥を感せず、徒黨を組んで、暗中にはびこる。

困果を信ぜず、大法にしたがはず、眞理に反逆して、其ゆく所世間を暗黑にする。

大地の上には、牢獄があり、裁判所があり、警察があり、遊廓があり、軍隊があるこれらなくしては始末におえぬ人間の部類である。單なる本能的存在にすぎぬ。

存在を超へて生活へ！　そこに自覺の天地がある、

生存とは肉の世界である。肉の生活をはなれてはすべてがない、自覺はけつして肉の世界をすてるのではない。

現實を如何に光あらしめるか。價値あらしめるか、自覺はそのまゝ生活である。

（聖光四月號の中より）

▼山縣郡太田部各支部聯合大會▲

會場　加計町丁川乾繭場

日時　四月十七日夜より十九日夜まで

講師　住岡主管外數名

注意

一。誌代拂込の際は光明と聖光との區別をはつきり記すこと。

一。轉居通知は新舊兩住所を書いて下さい。

一。誌代拂込は振替を御使用下さい。切手は使はぬこと、やむを得ぬ時は五厘か貳錢切手に限ります。

一。文字をはつきり正確にお書き下さい。

一。主管に特別の用事の外、申込、中止、送金等は一切事務宛に御送附下さい。

一。誌代前金切の時は、どうかお早く御送金を願ひます。お困りのお方は其御旨申越し下さい。

本誌定價
一部　金十錢（郵稅共）
一ヶ年　金壹圓貳拾錢（郵稅共）
毎月一回十五日發行
昭和三年四月十日印刷
昭和三年四月十五日發行
編輯兼發行人　花岡靜人
印刷人　佐々木温三
印刷所　光明團印刷部
廣島市八丁堀二十六番地
發行所　大日本眞宗　光明團本部
振替貯金口座下關貳參〇八番